
真・恋姫無双 ～蒼き空へ～

山中灯譜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫無双 蒼き空へ

【Nコード】

N3981X

【作者名】

山中灯譜

【あらすじ】

張伯定——彼はこの乱世を歩む。苦勞しながら楽しながら、上を向いて時に下を向いて、世界に抗い世界に刃向う、時に世界に馴染み世界を恨み、そして自分自身を裏切る様に……彼は歩く。

プロローグ（前書き）

どうもザンです。

いやー、何とか連載させるまでに至りました。ここまで書き上げるのに時間が掛かってすいませんでした。

まあ、期待していた人なんて少ない思っていますけれど。一応謝罪させていただきました。薄っぺらい謝罪ですいません。

では、これから読んで頂ける『真・恋姫無双〜蒼き空へ〜』を宜しくお願いいたします。

では本編です。

プロローグ

——人とは決断に迷う生き物である。

これが僕が一番初めに教えられた言葉である、のかは定かではない。でも一番古い記憶の中でハッキリと覚えていた言葉ではある。これを教えたのは恐らく、恐らくではあるけれど女性だったと思う。

何故ハッキリは分らないのかと訊かれれば、それは僕の記憶は十の頃からしかハッキリと覚えていないからである。十歳以前、十歳になる前の事は殆ど、断片的と言う風にしか覚えていない。

僕の母親と父親に当たるであろう二人を殺して、賊の頭として名を馳せた、と言う所までが全て断片的である。

そんなボロボロの継ぎ接ぎだらけで穴開きが酷く脆いの記憶の中で唯一覚えていた言葉——人とは決断に迷う生き物である——はしっかりと覚えていた。

確かにこの言葉通り、人は重要な決断に渋る傾向があるようだ。だからそれがどうした、と僕は言いたい。こんな言葉を僕に教えた女性に訊きたい。

何故、こんな事を僕の記憶に埋め込んだのかと——何故、僕の記憶に”こんな物”を刻み込んだのかと。僕は問いたい。

だがそれも既に叶わない願いである。何せ僕はその人を、その女性を、僕の——母を殺したのだから、

今更その答えを聞く事など出来ない。そう、永遠に……。

だから僕は自分でその答えを出した。母は僕にどうしてこんな言葉を残したのか、考えた訳だ。そして僕の考えた答えは——僕が、両親を殺す時に躊躇わない様にする為、だと考えた。

でも何故そんなことをしたのか分からない。でもその答えはしっ

かりと達成された訳だ、でなければ僕は今生きていないのだから。

「なんだこの本？ 最後が訳わかんないじゃないか」

そう言って僕は一冊の本を閉じる。

部屋に置いてあったから僕のかと思っただけで読んでみたけれど、こんな変な終わりを迎える本など、僕の最高の記憶力の中には存在しない。

しかもこの本、最初は誰かの英雄譚の様だったのだけれど、最後ら辺はその英雄の過去が唯つらつらと綴られているだけ、と言う何とも面白みのない物だった。

最初の方だけ読めば以外に面白かったのだが、やはり終盤のあれは面白くない。作者は何を考えてこんな作品を作ったのだろうか？
うーむ、謎だな。

「それにしても、この本誰のだ？ うーむ、華雄や恋が読むとは思えないし……霞、もないな。っとなると……詠さんかねねかな？」

本日も、晴天と言った言葉が似つかわしいほど晴れやかな空の下、
名を張繡ちやうしゅう、字を定伯ていはく、真名は蒼あおい——もとい僕は、この洛陽でのんびり
と暮らしている武官です。そうのんびりと——

「はい、次の仕事よ」

「……」

のんびりと仕事をしています。はい。のんびりと……。

「って、アンタまだ終わってないの！ 仕事が遅過ぎよ！」

この、僕を鬼の様な形相、とまでは行かないけれど、僕の仕事の
速度に対して怒っているのは、僕の上司の一人で賈かく？文和ぶんわ、真名を
詠さん。

武官である僕が文官もある程度出来ると知った時に脅迫きようはく、もとい
恐嚇きようはくしてきた張本人である。……脅迫も恐嚇も同じ意味だった気がする。
する。

「でもですね、こんな天気の良い日に部屋に籠こもって政務だなんて……
いえ、何でもありません。政務を精一杯させていただきます、はい」

無言の威圧、僕が助けた赤髪の大食漢の女の子が使う手を詠さま
も習得していたとは……しかも詠さんは恐ろしさの方が万倍もある

とは、女の子って怖いなあ……。まあ、今日一日は部屋で頑張るか道は無いらしい。

はあ、僕は何時^{いつ}になつたら外に出して貰えるんだろう？ 今日で多分四日は、武官の仕事をして居ないのだけれど。あの子はしっかりと調練出来ているのか不安だよ。

そんな事を思いながら、外に広がる暖かい陽光が差し込む窓を一瞥する。

翌々日。

「ふあゝ……今日は目一杯闘って寝るぞー」

政務からようやく解放されたのは、既に昨日の夜の話。僕は詠さんに今日一日休暇を頂いた、与えられた。だから久しぶりに今日は自分のやりたい事を目一杯やる気である。

まずはご飯を一杯食べると言う事は朝食の内に済ませた、後は僕の同僚である三人が暇である事を願う、と言うか鍛練中でもいいから模擬戦を数回したい。

まあ、その内の二人は別に断らないだろうけれど、出来るならもう一人天下の飛將軍と一手交えたい。何せ、僕は戦闘狂と言われる程戦いが好きだったりするのだから。

「さて、と……ここは何処だろう？」

うーむ、確か僕は中庭を目指して居た筈、なのに……どうしてこんな入り組んだ街の裏手に居るのだろう？ うーむ、この世はまったく不思議な世である。

と言うか、これは俗に言う迷子と言う奴ではないだろうか？ こ

の歳で迷子か……案外新鮮な気持ちになるな。と言うか、これが初めてじゃないし、よく道間違えるしな。

戦場とかじゃ迷わないのに、こう言っただ日常生活で部屋から出ると迷子になるなんて毎度のことだから別に気にしない気にしない。

「んじゃま、気を取り直して——適当に歩こうかな」

「おい、にーちゃん。ちょっといいかい？」

「……」

あー……これはこれは人相の悪い男の人たちに絡まれてしまった。さてこの場合はどうするべきでしょうかね？

選択肢その壱、兎に角逃げる。

選択肢その貳、なんとなく対話をはかる。

選択肢その参、面倒なので暴力的解決をする。

選択肢その肆、平和的に対話をはかる。

うーむ、難しい選択肢ですね。まあ、言ってしまうえば、僕的には選択肢その参をこり押しするんですけど、詠さんにそれは控えなさいと言われたばかりですし。ここは平和的——ではなく、なんとなく対話をはかるで行きましょう。

平和的に対話をはかるのとなんとなく対話をはかるのでは、大きな違いがあります。

『平和的に』というのは、暴力に訴えず必ず話し合いで解決する、という意志の下に行うものであり、僕が彼等と話して手を出さないと言う保障はないので、平和的に行く”かも”しれない『なんとなく』を選択したのです。Do you understand?

いえ、コレはただ昔に僕のお友達に教えて貰った言葉であって意味はよく知りません。でもその友達が言うには、相手が理解出来な

い時に言うものだと、言っていました。英語、と言う物らしいです。
閑話休題。

では、なんとなく対話をはかるを实行しましょう。

「What's your name?」

「あ？ 何言ってるんだオマエ？ 気でも狂ってるのか？」

おや？ どうやら彼等は、僕と同じ国の出身だったようだ。なんか頭が鶏の鶏冠とさかの様な物を生やして居るからてつきり異国の、僕の友達の人かと思ってしまった。

ほえー、こんな頭の人間がこの国に居るなんて。新種の仙人か何かでしょうかね？

「失敬、貴方がたの頭が余にもUnique、もとい可笑しかったですから」

「にーちゃん、いい度胸してんじゃねーかよ。おい」

「」「」「へい」「」

「へへへ、悪く思うなよにーちゃん。俺たちもアンタみたいな優男を殺したい訳じゃねーんだ。ただちよつと金が無くてな、にーちゃん大人しく金物ものを出して貰おうか？」

「イヤです。貴方がたにあげる位ならば、其処ら辺の犬や猫に渡す方が建設的でしょう。それに頭の悪さが分かる様な喋りをしないでください。クソ虫野郎」

「て、テメエ……痛い目みねえとわかんねえみたいだなッ！」

まったく、コレだからド低脳のクソ虫野郎はウザいんです、臭いんです、死んでほしいんです。これならば模擬戦なんて考えるんじゃないかった。これなら天和さん達の歌を聞いている方が万倍も有意義な時間を過ごせたと言います。まあ、彼女たち——と言つか天和さん——の胸の揺れしか見ていませんけれど。

天和さんたちって誰？ 天和さんたちとは、この前の黄巾党討伐で僕が偶然、偶々、奇跡的に拾った黄巾党首謀者の女の子たちの事です。と言っても、彼女たち自身は黄巾党などと言うクソ虫集団の事なんて知らなかったんでしょうね。様子からして。

ただ彼女たちは歌っていたら、信者の一部が暴徒化、天和さんたちの知らぬ場所で信者の証である黄色い布を巻いて略奪の限りを尽くし、尽くし続け破滅へと至った、と言う話です。

天和さんって誰の質問？ ああ、それはいずれ語るとしましょう。今は目の前の蛆の湧いた脳みそ腐りきったクソ虫野郎の駆除をしなければいけませんからね。

と、そんな事を考えている間に一人地面に埋まってしまいましたね。いやはや、弱過ぎますね。雑魚ですよ雑魚。これならば子供の頃に倒した狼の群れの方が、幾分かマシな程に強かったですよ。

「っ！？」

「まったく、貴方がたは不幸だ。もう少し相手を選んで恐喝するべきでしたね。いえ、選んで僕だったのですから、運は既に尽きていたと言う事です、そんな方がたに不幸だの幸運だのと言うのはお門違いと言つものですね。ではその尽き切った運を更に絞り出して僕の一撃に耐えて下さい。いえ、耐えなくても良いですよ？ 貴方がたの様なクソ虫野郎はここで——」

——死んで肥料になってください。

「ふう……まったく飛んだクソ虫の駆除でしたよ。まあ、今でも準備体操位にはなりました、さて城に戻って誰かと模擬戦でもしようかな」

僕は裏路地をゆっくりと歩き表通りを目指す。しばらく歩き続けると案外早く表通りに出ることが出来た。

「つて、ここは何処だ？」

出た先は明らかに大通りでは無くこの洛陽に住む民の住宅区だった。しかも城から一番離れた場所であることを示す様に、僕の後ろには城の一角が見えた。

「はあ……僕って方向音痴なのかな？」

01（後書き）

皆さまこれからもザンと『蒼の空へ』を宜しくお願い致します。

それと、若しかしたら1・2作品程連載して更新が物凄く遅くなる可能性があるかもしれません。その時は申し訳ありません。

ちなみに次回更新は決まっています、出来れば今月中に2・3回出来ればいいなーと考えています。

ではまた次回。

02（前書き）

どうもザンです。

もうなんとなく勢いで投稿します。

では本編です。

「あのー、詠さん。この仕事の量はちょっと、と言うか無理があるのでは？ 多分僕、明日には死んでる自信があるんですけど？」

目の前に動かざること山の如し、と言った風に簡書の山が出来上っている僕の政務室。しかも現在進行形で詠さんは部屋に簡書を運び入れている。

と言うかもう部屋の中が簡書で一杯なんですけど？ もう既に部屋は簡書で満たされてるんですけど？ まだ運びやがるんですか？

もう部屋の許容範囲は零ですよ？ もう足の踏み場どころか、空気のある場所まで無くなってますよ？ ってかもう運び込まないでください。お願いですから簡書を焼き払って下さい。もう僕死んでしまいます。明日と言わず今日、今死にますよ？

と言う僕の心の叫びも虚しく、僕の視界は簡書の山で満たされており。右見ても左見ても、上見ても下見ても必ず簡書の山が二つ以上目にはいる。

ちくそう、何でこんなに仕事が多いんだ。誰か文官連れて来い、優秀な文官二十人位連れて来い。全部仕事任せるから！

「そんな事言っただけじゃしょうがないでしょ。アンタも知ってる様に文官が全く足りてないのよ」

「だったら雇えばいいじゃないですか。何で僕に仕事の半分以上が回って来るのか不思議ですよ。ねねちゃんにも回してくださいよ」

そうだそうだ、文官が居なければ、文官を雇えばいいじゃないで

すか。貴方の頭は僕を過労死させる事で一杯一杯ですか？　こんなにやろう。

と言うかねちゃんは何してるの？　少しは僕の仕事を持って言ってくれよ。じゃないのお兄さん死んじゃうよ？　天国にGoしちゃうよ？

「無理よ、アレは恋の軍師で私の部下じゃないわ」

恋の部下だからって依怙^{えこ}鬚^{ひげ}はダメだと思います。そうやって与えた仕事だけしかさせないから引き籠りが生まれるんですよ。偶には厳しく接してあげないと、人はのぼせあがってそれ以外の事をしない屁理屈を喋る人形になるんですよ。

大人が正しくしっかり厳しく叱らないから、過保護過ぎる親が生まれてMonster Parentなんかが発生するんですよ。学校の先生が困るんですよ。

閑話休題。

いえ、今のは忘れてください。ちょっと熱く為り過ぎました。反省反省。

「僕も貴方の部下ではないんですが？」

「なんか言った？」

「……いえ、空は青いなーと」

もう、ド畜生！　とか言ってやりたいこの気持ちをどうにかして欲しいですよ、まったく。

なんで僕がそんな恐ろしい般若の様な顔で睨まれないといけないんですか？　それが毎日必死に精一杯生きて政務に勤しむ人に対する礼儀なんですか？　そんなの唯の脅しでしょあかりませよ。アメと

ムチじゃなくてムチとムチですよ。痛いのに更に痛いことされるなんて、唯の暴力ですよ。横暴ですよ。職場権利濫用ですよ！

とは言えず。僕はただ簡書に目を通して筆を走らせる。あーあ、いつになったら武官としての仕事に戻れる日が来るのだろうか？

早く闘いたーい。物凄く闘いたーい。滅茶苦茶闘いたーい。派手な闘いがしたーい。心が満たされる闘いがしたーい。……言ったら虚しくなってきた。

「さて、仕事仕事」

僕は、いつの間にか止まっていた手を動かす。

はあ、この前の休暇も結局、誰とも一戦出来なくて欲求不満だよ。

「早く戦いたいなあ……はあ」

▲ ▲ ▲ ▲

「まったく、アイツは何でこうも言う事訊かないのかしら？」

僕は、さっき程簡書運び終えた部屋の主——蒼の事を思い出して文句を言う。いや、コレはアイツが私の言う事を聞かないからイケないのであって、文句と言うよりも正当な愚痴である。……いや、両方とも其処まで変わらないか。

だが、アイツのあの態度は頂けない、と言うかム力つく。

普通なら上司の言った事は”はい”の返事のみで従うべきである。なのにアイツときたら毎回毎回僕に文句を垂れる、毎度だ毎度。

偶になら私も分からなくもないが、私が部屋に行くたび、出会うたびに、「仕事が多い」「もっと仕事を減らせ」「給金が割に合わ

ない」「僕死んでしまいます」などなど、うるさいと言ったらキリがない。と言うか本当にうるさい。

ま、まあ、私も最近はいつに頼りつ放しで悪いな～とは思いますが、それにしたって文官が足りないのだから仕方がない。

”正式な月の部下”で、政務が”まとも”出来るのは私とアイツを入れて恐らく五人としない程だ。まったく十常侍の兵なんか役に立たない所の話では無い。

仕事なんてして居る所なんか一度も見た事なんてない、その癖して税を増やせだの税を増やせだのあーだこーだとうるさい。

金に目が眩む腐りきった奴らばかり。蒼がアイツ等の顔を見たくないのが少し、いや物凄く――滅茶苦茶分かるわ、賛同しても良いと言えるわね。あのぶくぶくに肥った豚みたいな顔を何度殴りたいと思った事か。と言うか私に色目使うな！ 気色悪い！

閑話休題。

と言う所で私達には圧倒的に文官が少ない。だが十常侍の命令でこれ以上の文官を増やすなら十常侍が認めた者しか許さない、と言うから雇いたくとも雇えない。

まったく、アイツ等は僕らを殺したいわけ？ ってかアンタ等が死ねばいいのよ！ って言えればいいんだけど、月を盾に取られる以上は無理な話よね。

「はぁ……頭が痛くなって来るわ」

月を早く助けたいけど、どうすればいいのよ。

——ううん。弱音なんて吐いてられない！ 月を救い出す為に今は我慢するしかないわ。忍耐力よ、根性よ、気合いよ！

とは言っけれど……。

「この仕事の量は流石に私でもキツイかも……」

もう心が折れそうだよ、月……。誰か手伝ってー！

▲ ▲ ▲ ▲

「ん？ いま何だか詠さんの声が聞こえた様な……？ まあ、空耳でしょう、こちらも他人に構えるほど暇では——」

「……蒼、まだ？」

——ないのですがね？ その様な目で見ないでくださいよ、僕だって貴方と一戦、いえ百戦程やりたいですよ。ですけど、コレを終わらせないと民に迷惑が掛かってしまう訳で、そう言う事に現を抜かせないのですよ。

「あのですね、恋。僕も出掛けたいのは山々——って裾を引っ張らないでください、破けます」

グイグイ引っ張らないでー、もう服の耐久度は残り三十だよー。

……いえ、気にせずに。

先ほど詠さんが出て行ったのを見計らって入ってきた、策士、もとい『飛將軍』の二つ名で、巷を賑わせる女性——呂奉先りょうほうせんこと、僕がここに仕える前に——恐らく五年前位——拾ったLovely Cuteで僕を毎回癒してくれて、僕の一番のStress発散できる相手の恋れんです。

恋マジ天使です。可愛いです。撫でたいです。目に入れても痛くないです。一家に一人欲しいです。癒しのAuraが見えます。そして——強いです。マジ最強です。僕も十戦中八戦位しか勝てない程強いです。僕はいつか恋を越えて見せる男です。……恋の紹介か

ら僕の悲願になってますね。失礼失礼。

「いいですか、恋。この世には「為せば成る為さねば成らぬ何事も成らぬは人の為さぬなりけり」という言葉ある……筈です」

「……筈なの？」

「筈なんです」

首をコテンと傾げる恋可愛いです。もう僕のお嫁さんにしたいです。いえ、むしろ妹に！！ 妹萌〜！

……ハッ！ 失敬。僕とした事が変なAntennaが出てきて変な物を受信してしまいました。妹萌ではありませんので悪しからず。でも妹は欲しいです。

閑話休題。

「えーっと……ああ、そうそう。先ほどの言葉は、「やればできる。やらなければできない。だが何事も、できないのは人がやらないからだ」と言う意味になります」

「……知ってる」

「知ってますかー」

「……知ってる」

うむ、ならば言う事は無いだろう。って言うか首肯が可愛いです。なんて破壊力ですか、アレは！？ 僕のHeartがBrokenされる寸前でしたよ。未恐ろしい子ですね。いえ、未可愛いですね。

「では今の意味を理解して居るのならば、僕の今の状況はまさにその「やればできる」の部分にあたります。故に貴方のすべき行動は何ですか？」

「……………外に出かける」

不覚にも、不覚にも僕はこの時、僅かばかり、と言うか全力で期待していました。それなのに…………。

「蒼と一緒に」

もう、ね。こんな事を笑顔で言われたら断るのなんて無理です。まあ、彼女笑って無いんですけどね、って言うか無表情じゃないですか！？ まあ、良いんですけどね。

でも、でも彼女のお願いは断れません、無理です、絶対に。なんて言ったって、僕なんかと一緒に居たいと言う、彼女の思いは踏みにじりたくありませんからね。

僕は紳士です。女性のお願いは断りません。でも流石に僕も、諸手を挙げて政務を投げ出すほど人間出来てないんです。と言うかそんな人間になりたくありませんからね。うん、僕いい子。……………正直気持ち悪いですね、今の。不快不快。

と、今までつらつら意味の分からない事を言っただけで、結果的に、僕は恋の言う事は訊いてしまっ、ダメな人間なのですよ。

「わかりました。わかりましたから、服を引っ張らないでください、破けます」

もう何度言えば分って貰えるんですかね？ これが破けたら合計二百枚目に為りますよ。まあ、別にお金を使わないから、服一着位

なら良いんですけれど。

僕は簡書に埋め尽くされた中からどうにか足の踏み場を見つけ出し、一旦政務室を出る。勿論、恋は僕の後ろを器用についてきましたよ。

「で。今日は何処に行く気だったんですか？」

「……決めて無い」

「はあ……毎回言いますけど、誰かと何所かに行く場合は――」

「……何時、何処に、誰と、どう言う風に行くのか言え」

「……」

すっかり覚えてるじゃないですか。だったら何処を決めてくださいよ。

まったく、これじゃあ僕はただ政務を”サボった”だけになるじゃないですか。……いえ、今から出掛けるのは、決してサボリに行くワケでは無くてですね、恋を悲しませてはいけないと言う紳士心から来た物であって、絶対サボりたいとか思ってますから。これっぽちも微塵も思ってますん。

と言うか、結局僕は自分で自分の首を絞めている状況何ですよ。

いえ、首を絞める縄を買いに行く感じですかね？

「はあ……まあ、仕方ないと諦めましょう」

「……？」

首を傾げないでー撫でたくなるからー。と言うか、恋って僕より

身長が低いのかな？　なんか目線が同じ位置にいたるけど。

これでも一応男だから、女の子に身長が負けるなんて事があれば結構P r i d eが傷付きます。もう罫が入る感じです、まあ嘘ですけど。

「では行きましょう。ここで突っ立っていても、詠さんに見つかって怒られますからね」

「……ん」

02（後書き）

もう、ね。なんかこの頃内容の方が下手クソですね。

書いてて、あれ？ 何でこんな難しい話にまつてるの？ って事が多々あります。

自分、こう言う頭を使った会話とか心境とか書くの苦手なのに。その所為で中身が訳の分からない事になるんですよね。

詳しく説明しようとして、途中から話の内容が絡まった様に分からなくなる。みたいな感じでしょうか？

最近は何だかソレが特に激しい気がします。

次の更新は何時になるか分かりません。恐らくは10月の終わりが11月の頭ぐらいです。

ではまた次回。 ノシ

03（前書き）

どうもザンです。

なんだかこの頃更新が遅くなってる気がします。

まあ、一応の保険でタグに「牛歩更新」としている訳ですけど。なんて言うか牛と言うよりも亀？ 「鈍亀更新」って感じですね。

皆さんってこう言う更新ってどうおもいます？

ってな感じで、かるーい前置きを入れました。これに対する答えは出来れば教えて欲しいです。

では本編です。

「詠さん。本当に明日だけは休ませて下さい。で寝ければ本当に僕は死んでしまいます」

「死に掛けた奴が、僕の所までノコノコ来て元気そうな顔して言うな」

「いえ、僕って顔にそう言うの出さない性質たちですから」

「どんな性質よ、それ……」

というやり取りも、もう昨日の事。

僕は、詠さんに如何にかこうにかあーしてこーしてうんちゃらんちゃらどーちゃらこーちゃらして、凡そ一刻半程の交渉——と言えるのかは謎ですけど——の末に僕は今日と明日の二日間休暇を頂いた。

そんな折、僕の下に一つの報告が入ってしまいました。

その報告と言うのも、先日ちょこつと話に出た天和さんたちの事です。どうやらLiveを終えこちらに帰って来る様ですね。

「しかも明日、ですか……ありがとうございます、胡車児。今日は貴方も休んで良いですよ、天和さんたちの世話や護衛で色々疲れているでしょうからね」

「ありがたきお言葉」

金髪碧眼で僕の部下である、胡車児^{こしゃご}、真名を操^{みやま}という少女。僕が毎度の如く、拾って来た少女である。

その少女は、仏頂面で頭を下げる。胡車児は何故か僕にだけこの様に顔を顰めると言うか、無表情と言うか、嫌々ながらっぽいというか、僕を見る時や話す時は決まって不機嫌そうな顔をする。

僕以外の人なんかと話している所を見たのだけれど、その時は表情豊かになっていた。何故僕の時だけ不機嫌なのだろう？ 何か彼女の氣に障る事した覚えは無いんですけど。それに未だに僕だけ、真名貰って無い、ただ知ってるだけなんだよなあ。

「失礼します」

胡車児はペコリと頭を下げて部屋を後にする。なんか微妙に足が速いし。いや、別に彼女が好きだとか言うんじゃないんですけど、こつ……傷付くと言うか心が折れると言うか。出口が見えている迷路のようなもどかしい感じです。

彼女とどうすれば仲良くなれるのでしょうかね？

▲ ▲ ▲ ▲

やってしまったやってしまったやってしまったやってしまったやってしまったやってしまったやってしまったやってしまったやってしまったやってしまったやってしまったやってしまったやってしまったやってしまったやってしまったやってしまったやってしまったやっ

ま、まままままたやってしまった！ どうしようどうしようどうしようどうしようどうしようどうしようどうしようどうしようどうしよう……！！

どうして、私って不器用なんだよー！ い、いつも緊張して張繡さまの前だと上手く喋れないし、何話していいのか分からないし、顔が引き攣って上手く笑えないし！ 手先が器用でも意味が無いよー！ どうせならおしゃべり上手の方がマシだよ！ 神さまは私を見離れたの！？ 大体神様なんているのー！？ 私的には絶対ない気がするけど。でもこの前聞いた話だと、本屋の棚太郎さんは恋神とか言うのに祈ったら花屋の有純ちゃんあずみと結ばれたっていうし。でもこの場合は神さまって言うよりも二人共両思いだったけど、神さまなんて関係ない気がするんだけど？ これって神さまのお陰になったりするのかな？ その場合は私にも神さまにお願いしてもっと人前で話せる様に為りたいです、ってお願いしたいなー。

「よ、よしッ！ 今度こそ張繡さまとまともにお話するぞー！」

毎日常朝と夜にお祈りしよう！

▲ ▲ ▲ ▲

明日、天和さんたちが帰って来る事を胡車児から報告を受けた僕は、その事を詠さんに伝え街に出た。そして物の見事に、迷ってしまった。

はあ……この方向音痴をどうにかして治したいものです。

ま、気を取り直して散策開始と行きましょう。

「所で……、何故貴女たちがココにいるのですか？」

「「わかんないっ」」

僕の両腕にそれぞれ右腕左腕を絡ませている二人はニツコリと笑う。右腕に絡んでいるのは李儒^{りじゆ}、真名を魅陽^{みはる}。左腕に絡んでいるのは李肅^{りしゆく}、真名を魅陰^{みかげ}。

二人共、腰辺りまである長い茶髪を高い位置で一つに結った髪型をしている（左側に結っているのが魅陽、右側が魅陰である）。おそろいの白地に緑を基調とした鳥の刺繍（右に鳥の刺繍があるのが魅陽、左が魅陰）が施された上に、下は短い裾から太股にピッタリと張り付く黒い物を履いている。（黒いのはスパッツです！ by スパッツとレギンスを僕は間違えないの会）

この二人は、胡車児と同じ僕の隊の部下。今まで彼女たちに兵達の訓練を任せていた。一応今日も訓練があつた筈だが、何故か彼女たちは僕の隣で僕の腕に絡まっている。

「はあ……仕方ないと諦めましょう」

それ以外の選択肢は僕に無い様ですから。

「さて、何処に行きましょうかね…？」

「魅陰は、この前新しく出来た服屋がいいー！」

「魅陽は、いつも行く喫茶店がいいー！」

「……別に、貴女たちの意見は聞いてませんよ？」

「「ぶーぶー！」」

はあ……なんだか今日は物凄く疲れる一日に為りそうな気がします。まあ、僕にそんな予言じみた事なんて出来はしませんけどね。ま、気苦労程度で終わって欲しいものです。

僕は未だにぶーたれる二人を気にせず、城から離れる様に歩き出す。

「蒼さまー、そっちは住宅区ですよー」

「……」

しばらく三人で歩き続け、というか双子に僕がひつ付く形で街の一番の賑わいを見せる市へとやってきた。といっても、別に何か欲しい物があるとかではないんですけどね。
だから……

「「これ買つてー」」

「はぁ……魅陽、服を買うのは各かではありませんが、その量をどうやって持って帰る気ですか？ 魅陰、貴女ソレは売り物ではありません、とつと元いた場所に返して来なさい」

何ですか、アレ？ 緑色のウネウネヌメヌメした大量の何かを縦横無尽に動かしているんですけど。もう何か今まで見た生物の中でダントツで気持ち悪いんですけど。アレって生きてるんですか？

「「えー！」」

いや、こつちが「えー！」ですよ。何でそんな物欲しいとか言えるんですか？ 触つてて気持ち悪くないですか？ 大体Bodyもヌメヌメしてますよそれ。

「ぶー。これ限定品で滅多に手に入らないのにー」

「ぶー。すっごく可愛いのにー」

いや、何処が可愛いんですか、それ？ キモイだけですよ。大体女の子がそんな物を持つてる時点で可笑しいですよ。

「はぁ……」

もうため息しかでませよ。

李儒と李肅との昼を過ごした僕は、当初の目的であつた仕合いをするべく同僚を探したところ、本日は洛陽近辺に出没した盗賊集団の討伐に出たと言う事らしい。

いいなー僕も行きたかつたなー。……まあ、討伐に行ったら休暇にはならないんですけれどね。

というかどちらかというとそう言う仕事なら僕は喜んで引き受けますよ。机仕事ばかりの毎日じゃStressが半端なく溜まるんですよ？ 僕の一番のStress発散は戦闘が一番の特効薬ですよ。

まあ、我慢強さに定評のある僕ですから、今のところ辞めないでいるんですけれどね。

「はぁ……明日は天和さんたちに挨拶してから誰かと一戦したいですね」

明日の予定を立てながら僕は寝台の上に寝転がる。

一応、明日の夕方辺りに討伐組が帰って来る様で、あわよくば誰かと一手交えたいと僕は考えている。

僕の休みも明日までだし、休みが終わる前に如何にか一戦したいところである。

「それにしても、今日は疲れました……」

今日は結局、魅陽と魅陰に一日中連れ回されて僕はヘロヘロのヘトヘトである。出来れば今すぐにでも寝たいところだけれど、これから魅陽魅陰が僕のところに来るらしい。寝れば手荒く強制的に起こされるので、寝る訳にはいかない。

というか、僕よりもはやいでいた彼女たちは疲れて居ないのだろうか？ と疑問を持ちたくなる。何処にあんな体力が眠っているのだろうか？

調練の時はいつも初めに倒れるあの二人、体力があると言う訳でも無いのに、遊ぶ時ばかりあんな体力を持ち出す。まったく、女性の体は不思議である。

「あー……だめだ、眠い……」

無駄な思考をダラダラとして眠気を如何にか蹴散らそうと試みたけれど、全くと行って良いほど効果は無い。逆に眠気は増して行く気さえする。

と、こんな思考をしている間も無く。僕の瞼は落ち始める。

ああ、もうダメだ。眠い……。

03（後書き）

今回はオリキャラの紹介と言つか顔見せ、の巻きでした。

募っているけれどそれが表に出せない少女、容姿が同じ双子の少女。と言つ何とも言えない（悪い意味で）キャラが出来てしまいました。それでも、何だか狙って書いてるのが双子のスパツツです。これはある一部の方（正体バレてる気がするけど）へのご褒美、と言つか思いついたので書いた、設定です。

小話ですが、双子と言えば『無印・恋姫』で幻のキャラである大橋ちゃん小橋ちゃんはどつして『真・恋姫』では姿を消したのでしょうかね？ 結構可愛かつたのに……。

そして、『恋姫』にはこう言つた仲良しと言つか、息ピッタリの双子はいませんよね。春蘭も秋蘭もある意味、息ピッタリですけど、なんか少しズレ所が多い気がしますね。

なので、こう言つた息ピッタリの双子キャラを掻いてみたいと思つて居ました。故に、今回はその理想を実現させました。

と、言う風に皆さまに気に入られるのか、と言つ不安を持っていたので投稿がしぶっていました。すいませんでした。

ではまた次回。

04（前書き）

どうもザンです。

更新が久しぶりですいません。しかも内容が貧弱です。

すいません間違えてました（汗）

では本編です。

休暇一日目を終え本日は二日目に突入したばかりの昼。

僕は、昨日聞いていた天和さんたちの帰還に辺り、一応の顔見せをする事に決め、朝は城の自室で読書をしながら過ごした。

しばらくの間、僕の部屋は本を読み進めるたびに出る紙の擦れる音、窓の外から聞こえる葉擦れの音、時たま聞こえる鳥たちの唄が、日ごろの政務によって疲れた精神と心を癒す。

昨日、結局のところ僕は叩き起こされたのだった。しかも起こし方が手荒過ぎる。何で起こす時に剣を顔に向かって振るんですか？ 殺す気満々だったじゃないですか。というか僕じゃなきゃお陀仏のもの攻撃でしたよ。

あの二人は今度、調練でたっぷり痛い目を見て頂きましょう。
くくくく。

まあ、そんな事は置いておくとして、そろそろいい時間ですし、昼食でもとりましようかね。彼女たちに会う前に腹ごしらえを済ませて置く方が良いでしょうからね。

本を閉じ僕は何処で昼食をとるか考えながら本を元の位置へと戻す為に椅子から腰を上げた。その時、荒々しく扉が開け開かれた。

「失礼いたします！」

いや、扉ぶち開けておいて失礼も何も無いですよ？

「賈？様から至急招集の命です！」

「わかりました、下がって良いですよ」

僕の言葉を聞いて伝令は、頭を律儀に下げて急いで部屋を後にした。恐らく僕が最後では無かったらしい。

それにしても、緊急招集ですか……何だか面倒な事でなければいいんですけど。

それにこの頃は、靈帝死去、何進將軍暗殺、十常侍討伐、小弁帝暗殺、などと報告だけでAction無しで、呼び出されたんですよね。

はあ……なんかどーんと大きい戦いが来ないかなー。

「では、僕と華雄、霞の三人で当たる、と言う事ですね？」

詠さんは、そうよと不機嫌さを隠す事無くぶつきら棒に一つだけ頷く。

ようやく僕にも運が回って来ました。まあ、戦の内容とか戦が起こる理由は物凄く気に入りませんが、僕たちが勝つてしまえばいいだけの話であって、そんな些末な理由を気にする必要ありませんね。

ま、恋は分かって無い様——と言うか眠そう——ですけどね。他の人は、目に見えて憤りmaxな顔してますしね。

にしても、袁紹もことん高慢な奴ですね。この前の黄巾党の時も力無いくせに出しゃばって——軍が半壊して——ましたね。

まあ、あの場合は物量にものを言わせて、兵の事など捨て駒同然に扱ってましたし、今回も無謀の策なし突撃がお目見えするかもしれませんね。

ま、一発袁紹に大打撃を与えて、現実を教えてやるのも一興でしょう。物量では押しきれぬ真の戦をその脳に刻んであげますよ、恐怖と言うServiceも加えてね。

「蒼が怖い顔してるで、ありゃーなんか企んどるで……」

「蒼殿は、ねねよりも頭いいですから。恐らく袁紹にお礼をする案しかえしでも考えてるのです」

「頼もしいんだか怖いんだか、分かんないわねアイツ……敵には回しちゃダメって事は分かるけど」

「……ッあゝ……眠い……」

ふふふ、その首を長くして綺麗に洗って待っていると良いですよ、袁紹殿。

「今日は無礼講やーッ!」

霞は大声を張り上げて盃を天に掲げ高らかに宣言するように言った。勢い良く掲げられた盃からは、月光を反射して煌く白銀の液が、盃から零れる。

そして各所で上がる雄叫びにも似た声は、それを承知したと言う様に盃を掲げる。そしてたちまち賑やかな宴へと早変わりする。

僕はその光景が少し可笑しくて、嬉しくて笑みを浮かべてみんなと同じ様に盃を天へと、月へと掲げる。

僕にはこれが、縁起担ぎなのか、祈りなのか分からないけど。僕は、みんなと一つになれる様な、強固な絆を築ける様な意味がある様に思えた。

僕は盃に溜まる酒を一気に飲み干す。喉を豪快に鳴らしながら飲むのを周りのみんなは興味深そうに見る。僕は全てを飲み終わり、

空気を吐き出し様に大きく呼吸をする。すると周りから歓声が聞こえた。

「言い飲みっぷりですよ、張繡將軍！」「俺たちも負けてられねーぜッ！」「俺は將軍の倍飲んでやる！」「バカッそれは俺のだッ！」「もー、男って何で対抗しようとするかなー」「でも張繡さまの飲みっぷりは凄いよね」

「ちょ、張繡様ッ！」

などとワイワイ騒がしくなる。僕はそれにまた笑みを浮かべる。すると僕の名前を呼ぶ声に顔をそっちに向ける。すると其処には胡車児が、俯き加減に居た。

「ん？ 胡車児、どうしたんですか？」

「あ、あの……えっと……さ、盃が開いています……から、しゃ、お酌を……」

珍しく胡車児が言葉を濁しながら酒瓶を僕に向ける。しかもその頬は薄く染まっている所を見ると彼女は恐らく既に出来上がっているのだろう。

始まってそんなに経って居ないのに、既に赤くなっていると言う事は、彼女は結構下戸なのだろうか？ それにしては意識が結構ハッキリしているような気もするけど、ふむ以外に酒に弱いが意識がハッキリしている者も世の中にはいる様だ。

僕はそんなことを思いながら、未だに言葉が最後まで出ない彼女へと盃を向ける。

「酌、お願いしてもいいですか？」

「……は、はい!!」

胡車児は、花の咲いた様な可愛らしい笑顔で大きく首を頷かせた。その事に僕は少し驚きながら直ぐに微笑み返す。すると胡車児の顔が更に赤くなった。

僕と胡車児は二人で騒ぐみんなを見ながらゆっくりと酒を味わう。そんな周りが静かに為り始めた頃――目と鼻の先には騒がしく集団があるけど――、恋やねねちゃん、詠さんに月さんに霞、華雄と数人が集まる。

「ん……恋も酌する」

「ねねも酌をするのです!」

「なに端っこに一人逃げてんのよッ」

「詠ちゃん、そんな言い方はダメだよお」

「蒼く飲んどるか?」

「あおいぐいでぐれえ」

「はは、華雄はもうデレデレですね」

僕は静かに味わって飲むのが好きなんですけど、どうも今日はそれが許されないらしいですね。まあ、戦前の宴ですから、こう言う事があっても仕方ないですけどね。

僕は恋とねねちゃんに酌をされながらみんなで楽しく酒を飲み始める。それを見計らってか、遠くでは騒がしさがより一層激しくな

る。

僕は隣でみんなの事を心配そうに見ている月さんを見やる。その顔は今の所は影は見えないが、戦が始まれば彼女は必ず悲しい顔をするは筈、僕はそんな彼女の顔を見たくないけど、僕は戦が好きな戦闘狂、彼女の平和主義には相反する性質を持つ人だ。

だからこう言う時はなんて声を掛ければいいのか分からないけど、僕は君を守りたい。

「月さん」

「？ どうしたんですか、蒼さん？」

「……うつん、何でもないです。ただ、ただね…… みんなでこんな風にまた騒がしい宴をしたいな、って思っただけです……」

「……そうですね、みんなでもまた集まって騒ぎたいです」

月さんはニツコリと笑顔を僕に向けた。その笑顔は儚げで触れればすぐにでも壊れそうな程脆い笑顔だった。

僕はそんな笑顔を見て何を思ったのか彼女を抱き寄せた。酒に酔っていたのかも知れないし、彼女の儚い笑顔を見て守りたいと思ったのか。いやむしろその笑顔を壊したいと思ったのかもしれない。でも僕の思考は反射的に遮断され、彼女を抱き寄せていた。

僕の突然の抱擁に抵抗したのかもしれないが、僕にはそんな非力な抵抗は一切通じなかった様で、彼女は短い悲鳴を上げて僕の腕の中にすっぽりと納まった。

ぎゅーっと抱き締め、彼女の中の何かを押し出す様に、取り払う様に強く抱きしめる。

「月さんは、何も悪くないですよ」

僕は気付くとそんな言葉を彼女に耳に囁いていた。

僕の言葉を聞くとピクツと震える。そして次に僕の服を強く握りしめ小さく嗚咽を漏らし始める。

さっきまで近くにいたみんなは酒や肴の補充と厠に言って誰も居ない。ココには僕と月さんの二人だけ。

彼女は人前で気丈に振舞っているかもしれないが、やはり女の子。戦と言う言葉は優し過ぎる彼女には重すぎる言葉で、死と言うのは彼女を負いこむ。

しかも今日報告が来て、まだ戦も始まって居ないのにこれ程溜めこむ彼女は、恐らく戦が始まれば毎晩魘されて過ごすだろう。

僕は戦が好きだからそう言う感覚は分らない、でも理解して上げられるつもりだ。だからこんな言葉が無意識に出たのかもそれないいや、コレは酔っているから出たんだ。でなけりや僕らしくない僕は酒が入ると人はだが恋しくなつて女の子を抱き寄せ、泣かせてしまふのだ。うん、絶対そうだ。

だから、全てを僕の所為にして今は心おきなく泣くと言い。

「今は泣いてください、そして次は笑ってください。みんな貴女のお顔を守るために戦うんですから」

僕は彼女が泣き止むまで抱き寄せて頭を優しく撫でる。

しばらくして月さんが泣き止んだ頃、帰って来た詠さんに勘違いをされて、僕は殴り飛ばされましたけどね。

04（後書き）

今回は反董卓連合お知らせでした。

出来ればもう少し引き延ばしたかった、だが流石にみなさまをこれ以上待たせる事は出来ないので最終手段で反董卓連合を開始しました。

緊急招集で呼び出されるのに、タイミングを見計らう必要ありませんからねw だからこそ最終手段なんです。

こんな感じで慌ただしいですが、これからも宜しくお願いします。

ではまた次回。 ノシ

05（前書き）

どうもザンです。

何故か恋姫が結構書けたので投稿します。

では本編です。

「うぶ……気持ち悪い……」

「「蒼さま大丈夫？」」

「いえ、とても無事ではありません。物凄く、気持ち悪いです……」

僕の背後から魅陰と魅陽に心配そうに声を掛けられる。でも僕はそれに首を振って否定する。

うぶっ……首を振ったせいで更に気分が最悪に……。

僕たちは、詠さんの指示によって？水関へと来ていた。今のところ敵は来ていないけど、恐らく明日明後日には来るであろうと、斥候の胡車児から先ほど連絡があった。

ちなみに、僕達が？水関に付いたのは報告されてから一刻後だった。

そして僕は現在、物凄い吐き気に襲われている。一応教えておくけど、僕は馬に乗れないんだ。いや乗り物全般は僕は乗れないんだよ、情けないけどね。

でも人間乗り物なんて乗らなくても生きていける。僕には立派で強靱な足があるじゃないか！　って霞に言ったら、アホ言うなと言って馬に縛り付けられてココまで来た。

もう僕はダメ見たいです、みんなこれから頑張っ……。

「うぶっ……吐きそう……」

僕、復活！ でもまだお腹の辺りに気持ち悪い物が残っている様な気がするけど、大丈夫だ、問題無い。

ふふふふ、この戦、無事に終わったら覚えている事です霞……酒の中に睡眠作用の薬を入れて、それから外に放置して風邪をひかせてやりますよ……。

「蒼さま？」

「え？ ああ、気にしないでいいですよ操。報告を続けてください」

胡車児改め操とは、この前の宴の席で、お酒も入って良い感じのほろ酔いだった事もあって、滞りなくすんなりと真名を交換しました。

そして現在は、帰って来た斥候部隊の操から報告を受けている所です。ちなみに僕は報告が始まって少しして吐き気が治まりました。いやはや、魅陰に薬を煎じる事が出来るとは、今日初めて知りました。今度何か買ってあげましょうかね？

「はい。現在敵勢力は曹、公孫、馬、袁が二つです。そして片方の袁の中に孫を発見いたしました。今現在も増えています」

おやおや、何とも豪華絢爛、至大至剛な連合ですね。しかも、馬家と袁家ですか……これは面倒な戦になりそうですね。そして、それに……。

「孫……慧蓮さん、いや雪蓮ですかね、まあどちらにしても……ふむ、華雄がしっかり自制してくれればいいですけど……まあ、無理でしょう。……ならば、他に策を考えないといけませんね……うーむ」

「蒼さま、もう一つ報告が……」

悩む僕の袖がクイクイと引つ張られる。僕はそちらに顔を向けると、身長的に僕より低い操が必然的に上目遣いになる、そしてその上目遣いでこつちを見ていた。

く、なんですかこの可愛さは……！ ヤバい、物凄く撫でたい……。

僕は、そんな衝動と格闘を繰り広げ（数秒）、撫でたい衝動を殺して話を促す。

「どうしたんですか？」

「はい。外金げきんからです」

「砌きが？ それで何と？」

「混ぜろ、と一言、文にて届きました」

外金。真名を砌みぎは僕の部下で、今は帰郷している。

だが何処かで反董卓連合の話聞いたのだろう。まあ、コレだけ大きな話だ、聞いていたとしても不思議ではないし、どちらかと言えば当たり前と言えるだろう。

そして、文面からも分かる様に、彼も僕と同じ戦闘好きでこう言う大きな行事いくさには目が無いのだ。

鬘の様に棘々とはねた肩まである長め金髪、碧色の右目と眼帯で隠れた朱色の左目、整っている男らしい顔立ち、それが砌の容貌である。

その格好良い容姿で彼は至極当然的に結構モテている。帰郷する前、街の女の子数人と一緒に歩いていいる所を目撃したし、その前も、見た事がある。しかも華雄が彼に惚れているのも僕は知ってい

る。

華雄はアレで奥手だから、毎回毎回 Approach と言う名の模擬戦に失敗している様だけれどね。よく華雄と砌が言い争う（と言うか華雄が砌に突つかかる）のはこの城で日常茶飯事の名物でもある。

そんな彼が恐らくこの短い文に込めた意味は、帰って来る、と言う事になる。

ならばこちらとしても策の立て甲斐があると言う物です。そして彼は強いですからね。まあ、僕には数段劣りますがね。

「そうですか、分かりました。ありがとうございます、操。今日はもう休んでいいですよ、後の事は他の者に任せますから」

「はい。では失礼いたします」

「ええ」

そう言うつと操は去って行った。僕は操から聞いた情報をもう一度自分の中で咀嚼する。

そしてじっくりと咀嚼し終わると、僕はその情報を頭の中で整理する。そして今聞いた事と僕の考えを霞と華雄に伝える為に部屋を後にした。

「と、言う事です」

アレから二人を集め僕の考えを含めた操からの情報をようやく説明し終える。霞は厳しいなー、と漏らしながらもその顔には何所か嬉々としている。華雄は、今一理解出来ているのか分からないが、自信あり気な顔をしている……と言うか絶対理解できてない。

「ああ、それと、砌が帰って来るそうですね？　よかったですね華雄」

「なつななな何を言うきゃッ!？」

「「（囃んだ……）」」

「わっわわ私はあやつの事など、どどっどっでもよいわッ!」

と言いつつ華雄はそわそわと忙しく体の動きを止めない。しかもちらちらと外を気にしている様子。

いや、今日は来ませんよ？　などと言う様な事はしない。このそわそわしている華雄を弄る様に見る事こそ僕が今するべき親切しんせつと言うモノです。

「……わたしは先に休む！　いつ敵が来てもいい様に備えるのも武人の役目だからな、そう武人の役目だ」

はたしてその言葉は真か、良い訳か、それは本人のみぞ知る。だがしかし、確実にその顔は武人ではなく乙女の顔だった、と僕は言っておこう。

華雄は、ではなと何かを振り払う様に大声で言うと、そそくさと言う言葉を逸脱した落ち着きのない速さでその場を後にした。

それを僕と霞は見守る親の様な、弄る友人の様な笑みで見送る。

「にしても、砌と華雄ははってんせーへんなあ」

「ですね、いつそのことくっ付いてしまえば、弄り甲斐があるのですけどね。まあ、彼女にも自分の歩調がありますから、僕らがとや

かく言うのは得策ではないでしょう」

いや、どちらでも同じだ、くっ付こうが、くっ付くまいが彼女を弄る題材は減らない。でも僕達も彼女の不幸せを願っている訳では無い、できればくっ付いてくれる方が望ましい。

だがそれは彼女と砌の問題、僕達は成り行きを見るだけ。まあ、偶に焚き付ける事はしますけどね。

「にしても、やっかいな連中ばつかな。しかも、黄巾の時見た奴等までおるつちゅーことやから、今回は一筋縄やいかへんな」

「ええ、層々たる顔ぶれですよ。ですが……負けてやるほどこちらも甘くはないんです。それに……この様な虚偽を信じる輩に彼女に——月さんに触れさせる訳にはいかない」

中には気付いている奴等も居るだろうけど、そんな事をちっばけな真実よりも自分たちの名を上げる嘘に貪り付く奴等に、彼女の純真の心を傷付ける事は、この張繡伯定がこの真名誓って許す訳にはいかない。

「気合い入っとなるな」

「ええ、久しぶりの戦ですからね。日ごろの溜まった物を吐き出せるまたとない好機ですからね、ふふふ……この恨み晴らさでおくべきかあ……」

「（笑顔が恐ろしいわ……）気張りすぎんよーにな……」

「さて、それはどうでしょうかね？」

僕は不敵に笑いながら扉を片手で押し開けてその場を後にする。さて、これから少し準備をしておこう、僕もなるべくならココを死守したいし、その為に僕は頭を持っているのだから。

でも、やはり一番懸念すべきは孫ですね。あそこは色々と厄介な人物がいますし、何せ僕の考えを勘で読んでしまうのだから恐ろしいの一言だ。

後は……ああ、袁家に嫌がらせをするんだった。危ない危ない、アイツ等の”存在を忘れる”所だった。

ん？ そう言えば孫の旗は片方の袁の中に紛れてる、と操が言ってたな。……ふむ、風の噂は本当だった様ですね。

ふむ……そう言う事ですか……納得理解いきました。ふふふふ、そう言う事ですか……ならば少しかりココで恩を返しておくのも良いでしょう。

袁家への意趣返しと共に、孫家へと恩を返す、一石二鳥とはよく言ったものですね。

05（後書き）

何でしょうね、オリキャラが結構増えてますね。自分で書いてて驚きました。

最初はこんなにオリキャラ出す予定は無かったんですが、まさか5人も書いてしまうとは……しかもストックの方にももう1人いるし……自分、大丈夫かな？

そして華雄はオリキャラとくっ付けてみよう！ と思ってます。そして恐らく砌はサブ主人公的な感じなので、頑張って砌の話を書きたいと思っています。

ではまた次回。 ノシ

06（前書き）

どうもザンです。

今のところ頑張つて執筆してるんですけど、まったくもってネタが
思い浮かびません。

みんな、オラにネタを別けてくれ！……古過ぎるネタが出てしま
った……。

では本編です。

「……」

僕が？水関に入って七日。もう七日も経ったのだ。だが敵が一向に攻めて来る気配が無い。だが退却又は別の経路で来ていると言う斥候からの報告もない。

約十里（約4144メートル）独自調査による物ですので、正確ではない恐れがあります）の内にはいるだろう敵は、報告によれば6日前から動いていないらしい。なんとも呑気な奴らだ。

相手の土地に攻め込むぞ、と言う奴等がそんな悠長にしている良いのだろうか？ 攻め込むと言う事、それは即ち、自分の土地を開けて兵糧を持って来ると言う事。

兵糧は無限ではないのだから、普通ならば直ぐに攻めるのが常であり常識だ。何せもたもたしては、数に限りのある兵糧は日を増すごとに減っていく。

まあ、相手が勝手に衰退していくからこちらとしては有り難い一言だが、僕的には途轍もなく不満だ、欲求不満だ。

だから、早く攻めて来い、僕と誰でもいいから勝負しろ……

そして袁家に報復を……はあ、いかんいかん、欲求不満で変な呪詛を呟く禁断症状が出始めた。自重自重。

「はあ……良い事ないかな」

僕は城壁で見張りで一人ごちる。誰にも聞かれぬ寂しー呟きである。まあ、僕以外にもう一人いるんだけどね。

チラリと横を見れば其処にはスヤスヤと鼻ちようちんを作って気持ち良さそうに瞼を閉じて眠る小さい少女が居る。彼女は、霞の部

下で名を樊稠、真名を憩という。

操と一緒にいる事が多く、操曰く親友と言われる少女。

うむ、真名がしつかりと彼女を現している。この寝顔はまさに憩いだ、見ているだけで僕の心を癒し、綺麗にしてくれている。

あー……鼻ちようちん割って見たい……。前に一度割ったら、おおと言って周りをキョロキョロ見回していた。

あの仕草、もう一度見てみたいものです。

「……」

スピースピーと可愛い寝息を立てている、その彼女に僕は自然と指が伸びる。狙いはいわずもがな鼻から可愛らしく膨らんでは縮む鼻ちようちん！ いざ、我が癒しの糧となるが良い！

「ハッ……肉まん……」

「……」

指が当たる寸前、彼女が目覚まし訳の分からない、肉まんと言う単語を発する。だがその目は未だに——いつも——半眼が僕を見据えた。

僕の指は行く宛てもなく彼女の目の前を彷徨っている。僕は苦し紛れで彼女の柔らかな頬を突き、何とか誤魔化そうとする。

しかし憩ちゃんの目は何してるの？ と問い掛けている。なので僕はお茶目を加えてその瞳の問い答えなければいけない。

「いえ、ちょっと頬の肉が食べられるか……って、そんなに引かない、怯えない。別に今食いはしませんよ」

うむ、何か誤解を生んでしまったようですね。別に僕は胸ペツタ

ン、もとい幼女体型などに興味なんかは……何故でしょう、今呪いの呪詛が聞こえた様な？ 気の所為？

ふむ、まあ今は置いておくとして、まずは憩ちゃんとのこの変な空気を解呪しなければ。

「憩ちゃん、まずは人肉がどう言う風に美味しく調理できるのか、教えてあげま……こらこら、年長者の話は最後まで聞く物ですよ？ 大丈夫です、ただちよつと本音が漏れただけですから。ちよつとなんでガン泣きするんですか？ え？ 食べられる？ いや、確かに憩ちゃんは美味しそうですけど……っつて止めて下さい、泣かないでください。嘘ですから、半分くらい嘘ですから。いや、あの、本気で僕の腕を振り払おうとしないでください。嘘ですから、この話は全部嘘ですから」

僕は憩ちゃんに弄りを加えつつ説得を試みた。

ふふふ、僕の曰ごろの過重労働の恨み、貴方で晴らさせて下さい。と言うか、一行に攻めて来ない敵に若干イラついてるので、その欲求不満を晴らさせて下さい。

ふふふ、大丈夫ですよ、ちよつと虎と馬が合体した様な言葉の意味を体で覚えさせるだけです。大丈夫ですよー、怖くないですからねー……ふふふふふふふ。

「はー！ スツキリしました！」

キラキラと陽光を反射した汗を拭う動作をして僕は良い笑顔で空を見上げる。そして僕の後方では半泣き状態の憩ちゃんが城壁の縁^{へり}辺りに座っている。

うむ、少々反応が面白くてやり過ぎてしまったでしょうか？ でも本にあった『塵芥の王』の話とか『嘘つき男の話』『悪鬼羅刹の

話』とかばかりだったんですけど？

ふむ、嘘つき男の話は怖かったのかもしれないね、だってアレに出て来た変質者は憩ちゃんが好きそうだし。

自分がやった事ですし、しっかりFollowしておきましょう。

「憩ちゃん。お菓子食べるか……早いね、君」

僕が懷から取り出した自作のお菓子、それを前に出すと、既にお菓子は手に無く、気付くと憩ちゃんのくちはもぐもぐと忙しく動いていた。

うむ、彼女はいずれ恋を越えていく女の子だ。ふふ、これで僕が君に教える事はもうない様だ。

「……」

と僕はなんか変な事をしながら上を見上げた。そして憩ちゃんに視線を戻すと口の動きは止まっており、自分の手を見詰めている。

そして周りをキョロキョロと見た後、その半眼の目で僕を見上げ手を伸ばし口を開いた。

「おかわり」

「……あれ？　僕は選択をMissしましたか？」

その後僕は彼女に持っているお菓子全部を食べられました。しかも彼女以外に美食家なのか、僕の失敗作には手を付けないと言う事までしゃがりました。

僕のお菓子い……………ま、また作れば良いですね。それに何より、女の子の笑顔が見れるならこれ位お安い御用のお茶の子さいさいですよ。

「さてと、今日は来て下さいよ連合の皆さん」

夜。結局連合の皆さんは現れませんでした。……本当に何がしたいのやら。

僕は城壁で一人酒を飲みながら見張り——と言つ名の一人酒盛り——をする。月光に照らしだされた城壁から見える風景はとても絵になる程綺麗だ。

とその時、静寂を乱す様に騒がし奴がらわれた。

「ちわーっス、三河屋で……だわばっ!？」

「うるさいですよ、砌」

僕は飲み終わった酒瓶を現れた『金獅子^{きんじし}』と謳われる男の鼻っ柱にぶつける。男は、いたたたと言いながら体を起こしこっちに低い体勢で寄つて来る。

「ただいま外金帰つて参りました……ばべっ!？」

「何でも言わせないでください、う・る・さ・いですよ!」

僕は砌の顔に今度は拳で一撃をお見舞いする。それを受けた彼は城壁の上を跳ねながら少し先へと転がつて行つた。

金髪が獅子の様に外へ外へと跳ねた癖のあるやや長い髪、整つた顔つきは男らしさを十分に周りに見せつけている。武人らしい、と言つには些か細いが、しっかりとした筋肉が付いた体付き。

「つてて、痛いッスよー隊長」

「お前が声の大きさを考えないからです。僕は前に静かに飲むのが好きだと言いましたよ、ねえ？」

「ソーッスね。でも一人で酒盛りッスか？ 寂しいッスね」

僕はなるべく威圧感を全開に出して不快だと告げる。だが砌はそれを笑いながら肯定し、更に僕の気を逆なでする言葉を言う。

貴方は馬鹿ですか？ 馬鹿なんですか？ いいや、馬鹿でしたよね？ 馬鹿は馬鹿らしく地獄に落ちやがれです。

「ふふふ、どうやら君は城壁から空へと羽ばたきたいようですね？ なんなら今から僕が手伝ってあげましょうか？ と言うか死んでください」

「遠回しな言い方を無に帰す最後の台詞が本音ッスか！？」

「ええ、僕は君が死ぬ事を望んで生きている様な物ですから」

「カッコいい台詞、かと思いきやスゲーちっぽけッス！」

「とまあ割と本気な冗談は置いておきましょう」

「割とっ！？」

僕はこれ以上は流石に不毛で疲れるので話を打ち切り。酒を盃にそそぎいれ、一気に飲み干す。

「それで？ 帰郷はどうでしたか？」

「……滞りなく」

彼、砌も戦争によって親を亡くした孤児。だが僕が拾った訳じゃない、出会ったのは僕が月さんの下に仕官して二年経った時だった。最初は死んだ目をした生者と同じ、復讐にとらわれた獣と同じだった。でも僕たちと出会いその終わる事のない復讐から目を覚まさせた。

一番の功労者は華雄だったと言えるだろう。彼女が一番砌の傍にいて叱咤し、賛美し、見守り、愛していたから。

だから今の彼は、華雄が居なければ復讐に縛られた獣だった、と断言しても過言ではないだろう。普段は素っ気ない態度を取るが華雄と砌は相思相愛なのだ。まあ、華雄は今のところ片思いだと、絶対砌を振り向かせると思っているのだろうけどね。

いつそ華雄に砌も貴女の事が好きなんだよ？　と言ってやれば万事解決なのだが、如何せん其処まで世話を焼いてやる必要はない、と前に言っただし、実行する気は無い。

まあ、この話は置いておくでしょう。

「そうですか」

僕は彼の言葉に短く答え盃を彼に渡す。月光が降り注ぐ夜の城壁、僕と砌の二人は結構遅くまで酒を飲んですごした。

そして、この日が穏やかな日常の最後となった。

06（後書き）

オリキャラは孫堅さんを含めてこれで打ち止めです。

まあ、書きたくなったら恐らく増えるかもしれませんが。オリキャラばかり頭の中に浮かんでネタが出ない、倦怠期ですね、完璧に。

そう言えば、先日見つけた『小説について、あれこれと』で見たのですが、「小説家として必要な能力として、私は『発想力』『構成力』『表現力』『文章力』の4つを重視しています」という文章を見つけました。

自分には4つ全てが足りて居ない気がしてなりません。

ですが、現在自分はそれを解消するべく『小説について、あれこれと』で鍛える方法があったので、それを実践しようと思っています。

こんなダメ作者ですが、暖かく広い心でどうか見守っていただけたら、幸いです。

ではまた次回。 ノシ

07（前書き）

どうもザンです。

ココで作品紹介です。タイトルは『真・恋姫†無双 妄想伝』、作者はコイルと言つのですが。

面白いです。目目連さん並みの逸材と言えるでしょう。

主人公は一刀くんなんですが、現実的に書かれているので凄く感情移入できるし共感できます。

しかも、努力して戦闘力をちやくちやくと付けていくので、原作✓の中ではない一刀の戦闘シーンが見れますし、チートじゃない所がまた良いんです。

風景描写も心境描写もいい感じで会話文も結構面白いので、みなさん一度読んで見るといいでしょう。

（一刀くんもコイルさんも）これからの成長に期待すると共に、ますますの発展と応援をしたいと思います。

では本編です。

「ふむ、コレだけ揃うと流石に壮観の一言に尽きますね。ですが、あの軍が乱れた姿を見る時はさらに壮観でしょうね、ふふふ」

「……………（恐ろしい……）」

僕は城壁から目下に広がる連合の軍勢の乱れ彷徨う様を、頭の中で楽しむ。そしてそれが顔に出ていたのか、周りからは引かれた様な眼で見られた。

いいじゃないか、僕は必至ぶりの戦で物凄く興奮してるんだから！ お前等みんな机仕事僕に押し付ける癖に、そんな目で見るんじゃないやい！

「……………（すいません……）」

「さて……」

僕は呟いて敵から背を向けて振り返る。其処には緊張した面持ちで僕を見る、横に控えている霞や華雄でさえこの時ばかりは真剣な顔をしている。

「皆さん、これから戦です。人が死ぬ事は避けられない事実とと思って下さい。それは僕にしたって、張遼將軍や華雄將軍にも言える事です。確実に死神の鎌は我等の首元にある事をお忘れなき様に」

僕の言葉に大きくも小さくもない微妙などよめきが起る。それは不安が殆どで自信を持つ者など誰も居ない。僕だって万が一を考

え、絶対の勝利を確信していないし、約束はしない。

戦場に立つと言う事は自らの死を覚悟し、友の死を覚悟し、上司の死を予見し、大切な物を守ると決意しなければならない。

「ですが」

だが、そんな切迫した物を背負って戦える人間はいないだろう。人間一人には重すぎる荷物だ。人の命など一人で抱える事などできはしない。抱える事が出来るの奴がいるとしたら、それは既に獣と同じだと、僕は考えている。

「今から我等が行う行為は正義と自覚しなさい！ 我等がおかなくな事を正義と信じる者はいないだろう、だが自らが正義であると自覚し、戦いなさい！ 我等が正義の武勇伝は、他人から大悪無道に伝えられて良い物では無い、語るならば自ら正義の武勇伝として己が口で語りなさい！ 我等が正しかったと、我等こそが正義であったと！ 他人になどどう言われようと、我が駆け抜けたこの戦場を知るのは我等だけです！ さあ、今こそ勇気を振りしぼし武勇伝を作りましょう！ 我等が迎える明日の為に！」

僕の言葉を聞いたみんなは一瞬の静寂を経て雄叫びへと変わる。その顔に誰も等しく絶望は無く、勇猛と義勇を持ち、淀みなくゆがみなく天へと己が拳を高く、高く掲げる。

僕は鳴りやまぬ雄叫びを背に敵を見る。

▲ ▲ ▲

うッス！ 俺、外李雲^{げりうん}ってんだ！ なんかワクワクンぞ！
：

…うーん、なんかこれは流石に名乗りとして格好悪い。もつと他のを考えた方が良い。

蒼隊長の鼓舞で士気は最高潮の有頂天。斯く言う俺もあの隊長の言葉は胸に来る物がってスゲー興奮してるのが自覚できる。

俺もあの人みたいに強くカッコいい男になりたいぜツ！

まずは、戦いに勝って俺華雄に告白してやるんだ！ アイツには昔に世話になったし、その時に好きになった、普段はあんまりそう言うのを顔に出さないけど、何故か隊長にバレたんだよな。まったく、不思議な人だよ。

にしても、敵方は本当に豪華絢爛で有名所がいっぱいだ。曹操に孫策、馬騰と袁家……最後のは名前ばかりの看板倒れだけだな。

そう言えば最近はお劉備とか言うのも名前を上げているらしい。しかも今回の戦にも参列してるって操ちゃんと言ってたな。

だが聞くところによると天の御遣と黒髪の山賊狩り、がいるって話だ。天の御遣いなんかどうでもいいけど、黒髪の山賊狩りって奴とは昔あった事がある。

黒い髪を一つに結んだスゲー美人だった。ま、華雄の雄姿には劣るけどな。だが黒髪の山賊狩り、その名は意外に有名で、一撃は岩をも砕く剛撃で、一薙ぎで十人を切り殺すと言われる。

くくく、一度戦って見たいぜ黒髪の山賊狩り……。

「おい、砌。なにを締りのない顔をしている。今から戦なのだぞ」

「うつせ、わーってるよ。お前は俺のかーちゃんかったの」

「ふん、貴様の様な奴の母親など願ひ下げだ。ど、どちらかという……ゴニユゴニユ……」

うは、可愛い！ なんちゅー破壊力だよツ！ やっぱ俺はコイツにゾッコンだぜ。……そうだ、一応アレを言うておくか。

「華雄、この戦が片付いたら……モゴッ!?」

話したい事がある、と言おうとしたら俺の口に丸い物が無理やりねじ込まれる。俺は驚いて振り返ると其処には、両手いっぱい肉まんを持った隊長だった。

何しやがる! 今いいところだったのに!

「ふふふ、砌。それは君の死期を早めますよ? ですから……その口、戦が終わる前まで閉じていなさい!」

隊長の右手が動く。俺の口に白い物が詰め込まれる。くそ、まだ食ってる途中で、しかも俺がのみ込もうとした時に絶妙な所で入れ込んで来やがった。

何という戦闘経験の無駄遣い。相手の呼吸に合わせて動く武人として初歩をココまで磨いているとは、流石隊長だぜ。

だが俺も負ける訳にはいかない! 華雄にこの言葉を言うまでは!

「ふふふ、大丈夫です。今のところ貴方が出る幕など用意していませんから。大人しく眠りなさいッ!」

ふん、見切っ……モゴッ!? な、なに!? な、投げただと! ！ 確実に逆を突いたのに俺の口に投げ込みやがった!?

っち、だったら速度で攪乱してやる!

俺は足の回転を上げ城壁の上を縦横無尽に駆け巡る。俺の本領は速度、今まで隊長に負けなかった唯一の固有技術——ッ!?

「ふふふ、その程度読めています。僕とお前では埋まらぬ差と言う物を教えてあげましょう。自慢の足を活かすおは良いですが、速度を上げるには場所を間違えています、ここは走るには狭すぎる。故

に貴方は曲がる時などに無意識のうちに速度を制御しています。そして僕が今まで幾度となくお前と戦ってきたと思っっているんですか？——お前の行動など全て私は知り尽くしているんですよ」

「ッ！！ だったら！」

俺は曲がり角でも速度を落とさず駆け抜ける。その所為で筋肉が多少なりとも悲鳴を上げるが、今はそんな事を気にしいられるほど余裕ではない。

隊長を相手取るのに慢心はイケなかった。これは俺の落ち度だ。だがしかし、最速となった俺の速度に隊長は付いてこれない！このまま隙をついて——ッ！？

「ふふふ、分かっている様ですね。貴方が少し意識した程度で——癖が完全に抜ける訳ありませんよ？」

「モゴガッ！？」

神速の腕を振るわれ俺の口に肉まんが押し込められる。く、くそ——ッ！

俺の意識は其処で途切れた。

▲ ▲ ▲ ▲

「ふー、いい仕事をしました」

僕は足元に転がる死体^{みぎり}を踏みつけながら汗を拭う。

まったく、この馬鹿は何故自らを死期を早める行為に至るんでし

ようかね？ 馬鹿なのですか？ 馬鹿ですよ。 いや馬鹿だった筈です。

僕は余った肉まんにかじり……。

「憩ちゃん、それは僕ですよ？」

「んっ」

「自慢げに、とってやった見たいな表情しないでください。 はあ、まあいいですけどね」

いつの間にか現れた憩ちゃんに肉まんを取られた僕は、振り返って華雄を見る。

その顔は何が起きたのか、何故こうなったのか、分からないと言う顔をしている。 まあ当然な反応なんですけどね。

僕は華雄に砌を何所か寝かされる場所に連れて行くように指示してその場を後にする。 華雄のその時の顔はとても乙女だった、と言っておきましょう。

それにしても、何故憩ちゃんは僕の裾を強く握っているんですか？ 凄く可愛らしいけど、流石に親子に見えないでも無いこの構図は流石に……撫でなくなっちゃうじゃないですか。

僕は手を憩ちゃんの少し癖のあるフワフワした亜麻色の頭髮に手優しく置いて撫でつける。 憩ちゃんは瞼を閉じて気持ち良さそうな可愛らしい顔をする。

それを見て自然と笑みが零れない者はいないと言わしめる、憩ちゃんの奥義”憩い空間”を発動させたのだった。

はあ、凄く癒されます。 苛めるのもいけどこうやって正攻法で活用する方が凄く癒し効果がありますね。 今度から弄るのは程々にしましょう。

と言うかなんで苛めた僕に懐いてるんだろ？ …… まあ、いいや。

今はこの空間を堪能したいですいし。

僕はしばらく憩ちゃんの頭を撫でる。そして僕はふとみた城壁の外に一つの影が城に迫るのを見つけた。

「予想通り、ですね」

07（後書き）

戦前の鼓舞ってこんな感じで良いのかな？

砌君の所凄く書き易かったーw でもっていらない戦闘シーンを書いてしまった。でも砌君のフラグを折る為なんです！

……ワケ分からなくれすいません。

さて、今回は「げっ！ 関羽ッ！」の愛紗が登場！ そしてネタに走ってしまった自分を罵倒しないで！ 蒼、力の片鱗！ の3つで行く……筈です。

ではまた次回。 ノシ

08（前書き）

どうもザンです。

新しいPCが起動して初の投稿になりますね。

それと、更新が遅れて申し訳ありません。一応、活動報告の方ではいったんですが、テスト期間だったもので……

さらに、久しぶりでアレですが、今回は内容がはっちゃけてますのであしからず。

書いてるときに妙なテンションで、こうなったので、今後はおそろくこんなことは無いはずですよ。

では本編です。

城門前には一人の美少女が馬に跨りお馬の稽古、じゃなくて馬に跨り凜とした声で――罵倒を始めた。

いや、僕はそう言うので快感なんて覚えませんが、ちょっと横の人が頭爆発寸前と言うか、先ほどから刺々しい殺意が漏れ出して周りに悪影響を及ぼしているんですよ、これが。

既に数名の兵士が泡を吹いてるんですけど？ そろそろ戦始める前にこっちが全滅しそうなので、一旦落ち着いてください。

「と言うか、霞。なに貴女まで逃げようとしてるんですか？ 殴りますよ？」

「か、勘忍してーな。こんな空気ウチは耐えられへんのヤッ！」

「泣き事ほざいて無いで華雄を止めて下さい」

「無理や！ ウチにあの殺気に勝てる自信はあらへん！」

「一介の武将が殺気如きでグダグダ抜かさないで下さい！」

「いやや！ そう言う蒼が行ったらええねん！」

「僕はひ弱なんです！ 貧弱なんです！ あんなの相手に出来るほど僕は強くありません！」

「嘘言うなや！ お前恋と楽しそうに戦える変態たろがッ！」

「誰が変態かつ！ 僕は貴方と違ってこの頃机仕事ばかりで運動できてないんです！ だからアレを止めるだけの力は持ち合わせていません！」

などと口論していると……。

「張繡將軍、華雄將軍が城門を出て行かれました！」

「何イイツ！？」

慌ただしい戦場だ、とため息交じりに僕は零して僕達は眼前の敵を見る。

あれから直ぐに開いた城門に敵が辿り着く前に、如何にか兵を展開し現在敵の猛攻を首の皮一枚の状態ですべて死守して居る。

華雄はあれから真つ直ぐに敵へと突撃を掛けている。今の所は敵と拮抗している様だが、このままでは確実に負けるのは必至だ。

だったら、あの馬鹿を呼び戻してしまえばいい。城門に群がる敵を挟撃せきめるのだから。だが言うのは簡単、実行するのは至難だ。

華雄は敵の作った肉壁の向こう側、呼び戻すにもそれなりの存在でなければ、恐らく華雄は止まらない。

だったら答えは見えている。俺が行くのだ。俺ならば確実に彼女の下まで辿り着いて見せよう、そして拳骨一発ぶち当てて連れ戻す。うむ、我ながら質素で良い策だ。まあ力押しだから策と言うには些か頭脳が足りていないけどね。でも、やるしかない、やらなければこちらが負けるのだから。

「操、魅陰、魅陽」

僕は部下である三人の名前を呼ぶ。砌はまだ俺との悶着で寝かしてある、このままアイツを起こせば確実に華雄を救う為に命を捨てかねないからね。

僕の声に三人とも返事をしながらこちらを見る。

「僕は今から華雄を連れ戻す。それまで持ちこたえてください。それと中央に大きな穴をこじ開けます。これは君達三人でお願いします」

「ぶー、美味しいとこどりはずるいよー、蒼さまー！」

「そうだよー、魅陽も行きたーい！」

「魅陰、魅陽、蒼さまの命は絶対ですよ。蒼さま、ご無事で」

「まったく、操の爪を煎じて他の三人にの飲ませてやりたいですよ」

僕は苦笑いを浮かべながら武器である籠手、『だえん墮焰』を両手に付ける。感触を確かめて紐を強く結び手を開いては閉じ、を繰り返す。
OK、これで準備は万全万端！ いつでもイケます！

「では、操が一陣目、立て続けで魅陰魅陽の二陣目が追撃、そして僕の三陣目で貫きます！ お互いに合図を忘れないでください！」

「はい」

「「「らじゃー！」「」」

僕は構えをとる。両手を前に地面に広げる様に突き、腰を浮かし体重を前に掛ける。最速を求め考えた出した僕の師匠が使っていた構え。

名前は師匠が付けて居なかったから僕も付ける気は無い。

だけど、この技の威力は僕の七百七十七の技の中でも、高い攻撃力と速度を誇る。まあ、一直線にしか進めないし、構えて走り出してから少しないと速度が出にくく威力が無い、と言う欠点がある。けどこの技は、一瞬だけど爆発的な跳躍に似た疾走ができる。

例え砌の速度でさえも一瞬ならば凌駕するだろう程の威力。

「魅陰、魅陽、合わせて下さいね。私から合わせるのは——ちょっと難しいんです」

「了解りようかい！ 魅陰に任せてー！」

「魅陽もがんばって合わせちゃうよー！」

締まらない二人だが腕は確かだ。

三人はそれぞれ自分の得物を取り出す。操は指から目に捉えにくい糸を垂らし『空絡』^{からから}と呼ばれる自信より多少大きい人形を背中から出演させる。

魅陰は『月晴』^{つきはれ}と言う黒く細長い剣を腰からスラリと抜き放つ。

それにならって魅陽も同じ形の白い片手剣『月影』^{つきかげ}を抜く。

「では、行きますッ！」

そう言って操は腕を振り空絡を動かす。空絡を覆う紅い布のしたから大量の武器の切っ先が姿を現す。剣、槍、戟、棍、錘、槌、斧、鎌、釵、果ては鎖や鉄扇に短剣、狼牙棒なんかも見える。

だが驚くべきは、それら全ての武具を隠し持つて居る空絡の内容

量。アレだけ武器があれば隠す場所も部屋ひとつでは足りないだろう。だが大量の武具を内包する空絡は大きく見積もっても大人二人分程しかない。

だがそんな事を気にしているられるほどの時間はない。帰ってきたらゆつくりと訊くとしましよう。

「行くよ空絡——ッ、覇アアアッ！」

咆哮と共に空絡から切っ先を覗かせていた武具が、敵の群れへと来襲し、敵を突き刺し切り裂きなぎ倒し、命を狩る。そしてそれに合わせる様に、操の後ろから二つの影が飛び出る。

「「ひっさ——っッかげはれ影晴ええ——！」」

操が体を使って糸を引き空絡を引き戻す。それとほぼ同時に、絶妙な調子で二つ影が、口角を吊り上げ、楽しそうに技名を口走り、黒と白の剣を振りかざし交差する。

それだけで、たったそれだけで肉壁は七割を削り取られ、壁としての機能の殆どを奪われる。

僕は好機とばかりに、地面に突き立てた手と足に力を込め、歯を食いしばり、全身の筋肉と言う筋肉、筋と言う筋、骨と言う骨全て稼働させ爆発させる。

爆光とともに急激な加速を行い、僕は馬となり、風となり、雷となり、光へとなる。そして僅か七割の肉壁をぶち破る。

体全身が気だるさに襲われ、軋みを上げる。だがそんな事を気に掛ける時間は無い。僕は速度を少し落とすが足を止めずに前方の均衡状態の場所へと一直線に向かう。

辿り着くと其処らかしこに僕たち董卓軍の兵が無残に音を出さぬ

骸となり果てていた。僕はそれを見て齒を食いしぼり、華雄の下を目指す。

そして僕は彼女を視界の中央に捉える。黒髪の？月刀を持つ相手と戦っている様だが、戦斧は単調な軌道を描く攻撃を行っている、だがそんな子供の様な一撃は黒髪に軽く躲かれている。

何とかココまで持ったと褒めてやりたいが、些か愚行が過ぎる。

僕は跳躍を繰り返し、敵と見方の間を縫う様に走り抜ける。途中で邪魔な敵は軽く顎を打ち抜き行動を奪う。

そして正に黒髪の一撃が華雄に致命的な傷を負わせようとしたところで――

「ふざけるのも大概にしてください」

呟いて華雄を抱きかかえ一撃をギリギリで回避する。髪の毛数本が落ちるが気にせず華雄に一撃拳骨を脳天に入れる。

「――ッ!？」

「まったく、貴女と言う人はッ！勝手に断りも無く出陣しないでください！後処理が大変なんですよ！まったく、貴女の所為で無駄に兵を損失してるんです！頭をもっと使って下さい、この猪武者！」

再度一撃を脳天へとブチ込む。頭を押さえながら声にならない声でわめく華雄。そんな彼女を無視して振り返る。

僕が怒っているのは、僕や霞に何も言わずに出て行った事。どうせ挑発に揺さぶられる事は、僕の予想の範疇だったし、耐えられず出る事だって僕の策の内に入れていた。

だから、僕に何も言わずに出ていった事に驚いたし、憤りを覚えたんですよ。まあ、今は不問としましょう、それより……。

其処には先ほど僕達の門前に来ていた黒髪美人の人だった。確か名前は関羽、劉備の部下だと記憶している。

ふむ、なる程彼女が黒髪 of 山賊狩りか、確かに強い。溢れる雰囲気、立ち姿で彼女の力量が把握できる。

ふむ、だが――

「僕の敵じゃ無い」

「なに？」

関羽は怪訝に表情を歪ませ僕を睨む。そして同時に体から殺気が僕へと全力で注がれる。だが怖くない、これならまだ詠さんの睨みの方が恐ろしい。

「ん？ ああ、聞こえて居たんですか？ これは失敬。ですが事実を述べたまでですよ、僕が相手では貴方は恐らく片膝さえも付けさせる事などではしない、とね」

「ふん、武人同士の決着を邪魔した、貴様の様な驕りを持つ相手に私は負けん……」

「さて、それはどうでしょうね？ 僕は別に驕って居るなど思っただことは有りません。ですが貴方こそ必ず勝てると思っっているのは――驕りではないんですか？」

「貴様……いい度胸だ、武人としての誇りを持ち合わせぬ貴様に、私の実力をみせたやる」

龍の装飾がされた？月刀を構える関羽。その何処にも隙はなく、その何処にも慢心は見られない。だがそれがどうしたと言うのだ。

こちらとてまだ全力ではない、しかも隙を相手に見せない技法など既に体得しているし、僕の経験上で彼女よりも僕は強い。

「我が名は関雲長。劉玄德が一家臣！ いざ尋常に勝負！」

「名乗られたら名乗りを返すのが礼儀。ふふふ、我が名は張伯定。董卓軍の軍師紛いをしております武官です。ですが、その申し出は僕に何の利益もありません。ですが、貴方に僕が一つの”強さ”を教示してあげましょう。大海を知らぬ蛙ほど、滑稽で惨めな物はないですからね」

08（後書き）

蒼の力の片鱗をなんとなく出したかったので、こんな感じになっちゃいました。書いたときが妙なテンションだったんだと思います。

さて、久しぶり更新したのはいいんですけど、今のところこの後の展開ができてないので、またもや皆様を待たせてしまうかもしれません。

と、一応の報告をしておきます。すいません。

ああ、そういえば、テスト勉強の合間を見てなかなか面白い作品を見かけたので紹介します。

タイトルは『高校生の日常？』と言うので、『籠蟲』さんという方が作者です。

これは、物語シリーズっぽく書かれた作品で、主人公が悪魔と契約したタイトルどおり高校生で、そんな主人公が様々な怪異（女の子）と出会い、怪異事件（？）を解決していく……って感じです。

西尾維新さんのように怪異が凝って書いてあってなかなか面白いんです。皆さんも一度読んでみるといいと思います。

人によって西尾維新さんのパクリで嫌いだと言う人もいると思いますが、それがOKな方にはなかなかの出来だと思っていただけたと思います。

ではまた次回。 ノシ

09（前書き）

どうも斬滅のザン改め、山中灯譜です。
気軽に山中とか灯譜と及びください。

更新が遅くてすいませんでした。なかなかいい感じに纏まらないんですよ、これが。

ですが、そんな纏まりきつてないフラフラなこの作品とかあの作品とか読んでいただいて皆様に感謝感謝です。

自分もなるべく早く更新できるように勤めたいと思いますので、なにとぞよろしくお願いします。

では本編です。

僕は華雄を兵に任せ一人で殿をしている。それは決闘という手段でだ。決闘は武人同士が一对一のサシでの勝負をする神聖な物。

だが僕はその神聖な戦いを敢て壊す。

関羽と僕は武器を交えたが、彼女はやはり僕を楽しませてくれる器では無かった。だが、今後の成長はとも面白そうだから、殺さずに捨て置く。

そして、華雄が完全に引いた今、僕がここに留まる理由は微塵もないし、後ろ髪を引っ張る内容もない。故に、退却する。

「き、貴様！ 武人としての誇りと名誉はないのか！」

「誇り？ 名誉？ そんなモノは僕の生にはなんの意味も持たない言葉ですよ」

「なっ！？」

「では、偽善を語る黒髪の英雄さん」

「ま——！！」

僕はそこそこ力を込めた拳打の一撃で、包囲網の一点を突き破り、その場を後にした。後ろでは関羽の叫び声が聞こえたが、当然立ち止まらない。

僕はそのまま城門を目指し跳躍する。途中途中で攻撃を受けるが、全てを躲し、瞭然と視界に映る？水関へと辿り着く一歩手前。

何かが俺を襲う。閃光の様な一閃が、止まった俺の足元に半分もないほどまで大地に深く突き刺さる。

戦場ではこう言った奇襲、と言うには些かの不一致だが、奇を衒ったと言う意味では同じなのかもしれない。まあ、そんな不意を突いた一撃は確かに僕の急所を狙っていた。気付いて止まらなかったら危なかっただろうほどの危険な一撃だった。

そしてこんな事が出来るのは恐らくは、僕の予想どりの人だろう。

「久しぶりだな、張繡」

「これはこれは、夏侯淵殿ではありませんか」

弓を持つて現れたのは冷静な美人と言うのが表現に合う、曹操軍最古参の武将夏侯淵。冷静なのは見た目だけではなく、思考や物腰、雰囲気に至る全てが冷静と言える。

「私も居るぞ！」

自己主張を大にして現れたのは、夏侯淵殿とは姉妹で同じく曹操軍最古参の武将である夏侯惇。彼女も又美人なのだが、夏侯淵殿とは違う明るい元気な美人と言ったところだろう。

「おや、これは失礼した夏侯惇殿。して、何用ですか？ 僕は少々忙しい身の上ですけどね」

白々しげに僕は言いつつ視線を？水関へと向ける。今のところは持ちこたえているが徐々に押されている様にも見える。

このままココで油を売って居ると確実に突破されるだろう。僕だって頭脳派を語っているのだから、目的を忘れて私欲に走る事はない。

「なに、私達と共に来れば忙しくなる事は無いだろ」

「私は嫌だが、華琳様の命だ。貴様を力ずくでも連れて行くぞ!」

「話の展開が早いですね夏候惇殿。些か戦闘に入るには会話が少ない気がするのですが――」

「問答無用! 覇アアツ!!」

まったく。魅力的な誘いではあるのですが、僕としても護るべき物とやるべき物の区別くらいはつけられる。そんなに子供では無いし、ましてや獣ではないのだから。

それにしても夏候惇殿は相も変わらず熱くなり易いと言うか、単純と言うか、あらゆる物事の解決方法にいつも武を持って来る御方だ。

斯く言う僕も武で決める事が一番だと思ってはいるのだけれどね。

「やれやれ。相手をしている暇は無いと言ったんですが、ねツ!!」

堕焰で夏候惇殿が振り上げる大剣を防ぐ。流石は夏候惇殿、この一撃に物凄い威力を感じる。恐らく対処がもう少し遅れれば腕が弾き飛ばされていただろう。

まったく黄巾党の時より強くなっていて僕は嬉しい限りですよ。ですが……

「温いですよ。この程度で僕が止まるとお思いか?」

「ふっ、この程度で私を計ったつもりか。思いあがるなツ!」

力がより一層僕の腕に掛かる。この程度で壊れるほど柔な作りでは無いにしろ、些かこのままで？水関が突破されてしまう。早々に決めるしかないようですね。

「すいませんが、先程も言ったと思いますが、ココで油を売る暇はないんです」

「ふつ、私の知った事では無い！」

「まだ分からないんですか？ 僕を止めるのに貴女では役不足、と言っているんです」

「舐めるなッ！」

刃が墮焰から離れ威力を増した一撃が来る。だがそれを見切り、逆にこちらの攻撃に持ち込めば僕の勝ち——ッ！？

風を切る音を知覚した僕は、首を即座にずらし飛来してきた何かを躲す。類には鋭利な刃によって切り裂いた様な痛覚を感じる。

恐らく。いや、確信を持って言えるだろう。人一人を挟んだ先にいる僕を狙^{あいて}つて、矢を放つ事が出来る精密な弓捌き、尚且つそれを支える強固な集中力を持っているのは、この場に置いては夏候淵殿ただ一人だろう。

僕はこのままでは夏候惇殿の攻撃を喰らうと判断し、後方へと飛びずさる。そして見事僕の居た場所の地が砕け散る。

あの大剣はなにか仕掛けでもあるんじゃないだろうか？ と疑いたくなる。

しかし、一人で勝てないから二人で来るとは……中々に面白い事をして来るものだ。それに二人同時に良く夏候惇殿が許したものだ。短絡的思考で激情家、悪く言って馬鹿だが、戦いの作法と云うか礼儀を弁えるのに、今回の様な二対一と言う卑怯——僕はそう思わ

ない——と言えるやり方で僕と戦うなど。

彼女の中の誇りが許さないのではないだろうか？ まあ、僕には
そうでもない事だ、早く済ませて城門を閉じなければいけない。

「避けるな！」

「無茶を言いますね、貴女……」

「ええい、私に斬られるッ！」

連撃が僕を襲うがそれを躲し、往なす。どれも一撃は必殺と為り
得る程の脅威、だがこの程度ならば問題無く対処できる。

さて、どうした物か……。僕が攻撃に転ずれば夏候淵殿の弓が手
助けに入るし、かと言って防御に回ると時間が無くなる。

しかしだからと言って夏候淵に近づこうとすれば夏候惇殿に阻ま
れる。さてさて、本当の本当にどうした物か……。ふふふ。

再び夏候惇殿の攻撃を墮焰で同じ様に防ぐ。時間は無い、だが楽
しい。これ程切羽詰まった状況は本当に久しぶりだ、だから僕をこ
んなにも興奮させる。

無理難題で結構。そい言う無茶をするは僕の好みだし、何より初
めっから逃げ腰で当たる様な、腑抜けた男にはなりたくないからね。
僕は口角がつりあがるのを自覚しながらも、両足を地面に突き刺
す勢いで踏みしめる。

「ふふふ、さすがは噂に名高いお方だ。ですが……時間の様ですね」

僕が？水関を見ると人が屑の様に吹き飛ばされる光景が見えた。
そして、それを起こしたと思しき影が悠然と立ち尽くしている姿が
見えた。

「おやおや、金獅子が目を覚ましましたか」

僕は戦場の喧騒をが静寂した中で、僕は一人頷く。そして今更ながら、僕は言っている事とやっている事が矛盾していたことを、遅れて理解した。

09（後書き）

アイヤー……こんな感じで果たして良いんだろうか、と思うような展開になっちゃいましたよ。

もう、春蘭姉さんと秋蘭姉さんとの戦闘シーンとかおざなりですよ
ねw

あと、メンドウというか若干目目連さんを意識して書いてみました。
難しいですねー、他人をパク……真似るのってww

目目連さん、すいませんでした。ちょっと魔が差してと言いますか
……言い訳してすいませんでしたー！ つい出来心だったんです！
申し訳ありません目目連さまーッ！

では、目目連さんに起こられるのをびくびく待ちながら、また自戒
（次回）。ノシ

10（前書き）

どうも灯譜です。

最近はゴロゴロし過ぎて太ってるんじゃない？　と思う今さっき。

皆さまいかがお過ごしでしょうか？　あ、彼女とデートとか言う人は、この先末永くお幸せにどうぞw

ふふふ、自分ぐらいいなれば「リア充爆発しろ」とか言いませんよ。むしろ応援、と言う名の邪魔をするのですw

まあ、そんな奴が近くにあんまり居ないんですけどね。

つとまあ、強がりもならない事を言いつつ、自分はクリスマスは家族と家で過ごす寂しい奴です。……彼女が欲しいぜ。

ではこんな近状など無視して頂いて結構。ではクリスマス寂しく過ごす同胞、又は彼氏彼女と見ているアウトロー共（居ないと思うけど）、幸せなメリクリを過ごす事を願います。

では本編です。

「まったく、蒼さまと言う人は！ 何で毎回毎回、目的を忘れて無茶して戦うんですか！ ケガでもしたら私達が心配するじゃないですか！ 蒼さまの体は蒼さまだけの体なんですから、無茶しないでください！ そもそも、蒼さまはもつと戦闘願望を抑えるべきなんですよ、戦って来ては満足そうな顔してますけど、必ずケガして帰って来るんですから。子供のケンカや森で遊ぶのと違って、命の危険があるのをどうして理解出来ないんですか？ 蒼さまはバカなんですか？ 間抜けなんですか？ 死にたいんですか？ 死なれた困るんですよ？ 理解していますか？ それに……何ですか、あの無茶苦茶な指示は、関を絶対に通すな？ やつてのける自信は十分にありますが、あんな無茶な策戦とか言う愚策は辞めて下さい。こっちも精一杯やってますけど、今後続く戦いの事とか考えてますか？ 頭いいのか悪いのか、私には蒼さまの考えが分かりませんよ。ホントに、全くもお。まだあります、座ってください。この際だから副官である事を抜きにして言わせて頂きます。机仕事をして落ち着いたかと思ったら、今回見たいな奇行に走って居る様でしたら、今度一切の戦闘行為及び武器携帯所持を禁止しますいよ？ 禁止です禁止！ 今後一生に置いて私が蒼さまの生活健康管理から、護衛まで何でもございれの万能副官としてついて行ってあげますよ。いいんですか、それで？ 私は良いですよ。蒼さまと一緒に居られるなら、この身を地獄にでも落として差し上げますとも。ですけど、それでは意味がないですよ。私は蒼さまの為に生きる事が出来るかも知れないけど、蒼さまはそんな私を好きになつてくれないかも知れないんですから。私の言う事が理解できますか？ 私は蒼さま

が大切なんです、長生きして欲しいんです。なのに蒼さまときたら、人の心配を無下にして突っ走るんですから。私は蒼さまの何なんですか？ 副官ですか？ 小さい女の子なんですか？ 足手まといですか？ 私はそんな物じゃ嫌なんです、満足できないんです。私は蒼さまの本音を聞かせて頂く、良き家臣でありたいんです。私も成長しました、胸はまだまだ小さいですけど、きっと成長します……多分。って、そんな事は置いておいて。私が言いたいのは、蒼さまはもっと、今以上にもっと周りを信頼して頼るべきなんです。ですから、私を頼ってください。信頼して下さい。これからは私も蒼さまに頼って貰える様に努力しますから。だから、もっと私達を傍に置いてください。無茶……しないでください、お願いします」

開口一発目に千文字オーバーな文字を余で頂きありがとうございます。ですが、ヤンデレではありませんので、ヤンデレ好きの人にはすいませんです。

僕は、この台詞を聞いた後に更に2刻半ほどの説教を頂きました。もう、操を怒らせる様な事は一生しないと誓いますよ。

「ん」

僕を労わってくれるのは憩ちゃんだけです。ああ、ちっちゃい手が僕の頭を撫でてー。こっちも撫で撫でてあげましょう。

「んう……もつと……」

はうわー♪ いやーさーれーるー。

僕たちは、？水関を放棄する事となってしまうた。流石に数で押されると無理でした。

ちなみに、僕たちが？水関から撤退するまでの間を砌が一人で抑えて居てくれたのは、ちょっとした蛇足です。

流石は金獅子と言われるだけの實力を持っていますね。彼の愛剣である大剣の『千韓^{せんかん}』、その一振りで二十人は斬って居たんじやないでしょうか？ あの剛力に加えて最速の足とか卑怯すぎますよ、彼。ひよつとしたら一人で一軍を全滅させるのも訳ないんじゃないでしょうか？

ま、彼にそれだけの体力がないんですけどね。それにしても、何で強い人間って三大欲求の一つが糧になっているんでしょうかね？ 恋しかり、雪蓮しかり、恵蓮しかりですよ。

ん？ 僕は無いのかって？ そうですねー、無いのかもしれない。これと言っては食欲も性欲も睡眠欲も普通ですしね。……って事は、僕って余り強く無かったりして……まあ、別に強い相手と戦えればいいので、僕自身が強く無くてもいいんですけどね。

それにしてもあの時、僕は守るとか何とか言ってたくせに結局、欲望に負けて戦っていた。それが少しだけ悔やんでいて、自分に苛立ちを覚える。

まったく、獣じゃないとか言っておきながら、あの様^{さま}では、本当にお笑い種だ。

にしても、流石は砌と言ったところですか。あの状況で出てくるなんて、仕込まれた演舞のようでしたよ。あんな丁度良い時機に出てくるのは、男としてちょっと妬けますよ。

まあ、僕の部下ということ、これが終わったら何か馳走してあげる位は、してあげるとしましょう。

ちなみに、現在砌は張り切り過ぎて馬の上で爆睡しています。手綱は寝ながらも持っているところを見ると、凄^{すご}いと言いかちよっと僕も挑戦したくなります。

まあ、寝てたら挑戦しても覚えてないんですけどね。

「なー蒼。次はウチも出れるんやろなー？」

「さあ？ 次は僕ではなくてねねが指揮を担当しますから。僕にも

分かりません。ですが、僕だったら霞さんの機動力は相手を攪乱で
きますからね」

「さよか、ほんなら次は気張って行くとしますかー！」

霞さんがうおっしやーとやる気が目に見えて分かる程の雰囲気を出しながら馬を走らせて先へ行ってしまった。はて、何か彼女の士
気にかかわることを言ってしまっただろうか？

「……朴念仁」

憩ちゃんが何故か不貞腐れたような態度で僕の服を引っ張った事
が、妙に印象に残った。

うむむ、何故なのでしょう？

憩ちゃんを愛でながら馬に揺られる中で僕は、その答えを模索し
ながら最後の砦、虎牢関へと向かった。

そしてふと僕は来た道の先、見えなくなった？水関を振り返って
みてみた。其処にはやっぱり何も無いけど、僕の中にある妙は不安
が拭えなかった。

「……どーしたの？」

「え？ あ、いえ、これと言ってなにも……」

「……そういう時は、大抵なにか考えてるんだよ？ 知ってた？」

「子供の癖になかなか悟ってますね、憩ちゃん……確かに悩んでい
ますけど、今のところは僕の気のせいですから」

「……そう言って重要だった確率は、七割五分三厘だよ。知ってた

「？」

「……もう何も言いません、憩ちゃんには敵い^{かな}そうに無いので」

何だろ、この子は人を癒す効果持つておきながら、言う事が辛口で、僕でも時々、全てを見られてる様な感覚に陥ってしまいそうな事を言う。”変な子”ならぬ”知った子”と言う感じた。……うん、全然上手く無かった。

……まあ、彼女の過去が今の彼女を形成しているのは明らかだろうけど、昔なんて僕は知らないし、知る気なんてない。

そう、過去なんて誰もが持っている汚点を隠すのに持って来いの、^{てい}体の良い口述でしかないんだから。過去に必ずしも真実が必要だなんて事はないんだから。

過去は嘘で塗れている方が自然で、嘘であつた方が良い事もあつて、嘘であつた方が救われることだってある。

……うん、あんまり僕はこう言う風な、謎を残すのは物凄く苦手な様だ。現実逃避もいい加減にしないと、流石に飽きる人が出て来るだろう。

何に現実逃避したんだろうね、僕は……

「……勝った、肉まんおごつてね」

彼女は無表情で言った。その顔に逃す隙など与えないと言っている様で、僕は引き攣った笑みで問い返す事しかできなかった。

「君、なかなか可愛い顔で腹黒いですね……」

「……うん、元から」

「自覚しているッ!? しかもその歳で前からですか!？」

「……うん、私30歳だから」

「自然な流れで嘘を吐いたッ!」

「……コレは本当」

「嘘だと言ってくれ!!」

「……嘘だあ」

「なんか違う!」

「……蒼は面白いね」

「からか揶揄われたんですか!？」

「……はんぶ、全部」

「今、半分って良い掛けましたよね、嘘だってバレてますよ!」

「……ちつ、惜しかった」

「惜しくない!」

僕と憩ちゃんはそんな感じで馬の上で忙しなく会話しながら、最後の関”虎牢関”へと到着した。

虎牢関。僕達の最前線の防衛拠点であり、僕の知る歴史上のもっとも”堅牢”と謳われた関である。

……うん、何だか有り触れた貧弱な紹介だ。こんな紹介だから、

固いとか言われる虎牢関が弱々しく見えるんだ。

憩ちゃん風に言っなら……

「そんな風に、期待させるような事を言うから虎牢関が直ぐに落とされるんだよ。こう言うのは、関が固いとか関係ないんだよ。要はこの虎牢関を扱う武将の腕なんだよ？ 分かる？」

って感じかな。まあ、彼女はココまでおしゃべりじゃないからちよつと捏造してる所もあるけど、概ねこんな感じかな。

……………あ、「…………」を付けるの忘れてた。

10（後書き）

うーい、操ちゃんパネーッス。頑張って書いたけど、多分ほとんど内容が理解できていない方が多かったと思います。

さて、中々憩ちゃんが好きな自分がいて、彼女との絡みを書いてみました。メインは憩ちゃんです。

そして、頑張ってシリアスを少し絡めて見ました。

小説書きはじめて1年ちよつとのこの頃ではあるんですけど、ようやくキャラの役目（？）見たいなものが理解できた気がします。

ではまた次回。 ノシ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3981x/>

真・恋姫無双 ～蒼き空へ～

2011年12月25日18時51分発行